

田治郎、綜芸舎、六〇一六二頁 東洋史辞典に創元
新社へ鄭参照

魏の鄴都
魏の洛陽城について述べる前に、魏帝国創
建の基礎を固めた曹操が、後漢末にまづ建設
した魏王の都城、鄴都の構想に、少くも一
々触れておきたい。
曹操は、後漢末の混乱期の建安九年（二〇
四）反乱軍が占領していた鄴城を攻略し
やかたそこに宗廟や宮殿を建てて王都とした。
この鄴都の宮城の西北隅（西城壁の北端部
には、三台と呼ばれる「物見台」があった。
これは、周時代から流行していた台の杜大なるので、三
つ、南北に並べられていた。上に、娯楽や展望用の
建造物が設置されており、同時にこの三台は
鄴王城守備のための軍事的施設ともなってい
た。
曹操の鄴城は、東西七里、南北五里の東西
に長い長方形だったようであり、城門は合計
七つ。そして、宮城内北端近くに、北宮があ
ったと考えられている。（「中国の帝都」村
田治郎、綜芸舎、六〇一六二頁）

大蔵 166P

帝 北

大蔵 2256P
カカ

大蔵 2266P
カカ

大蔵 1836P
カカ

大蔵 1349P
カカ

$\odot 1215^{\circ} - \frac{2}{3}$ 下
 12月に郭から遷す
 禮 = 哀 小林
 延康から黄初へ改元
 $\odot 1139^{\circ} + \frac{2}{3}$
 花ひさく長安 26° 緯史行 284°
 三目友(株) $1-58$
 $\odot 1215^{\circ} - \frac{2}{3}$ 66才 漢
 中口の帝都 60°

曹魏の洛陽城

後漢末年の建安二十五年（二二〇）正月庚子に、魏朝最初の皇帝になるはすだった魏王の曹操が薨去した。そこで曹操の長子曹丕がまゝ魏王を継承し、同年三月には延康と改元。十月乙卯に後漢最後の献帝が退位して、魏王丕が皇帝になった。年号は黄初と改められた。こうして平和裡に曹魏の朝廷が成立した。だからいわば必然的に、後漢のあとをうけて魏陽城が魏の首都となった。中国の帝都村田治郎博士舎、六頁参照。つまり曹魏（二二〇―二六五）は後漢の帝都雒陽城をそのまま帝都として用いた。もともと、洛陽は昔日の影なきまでにくかり焼き払われ、わがかにその城壁を残すのみという有様であつたから、この焼土の上に、再び、国都としての経営が開始された。即ち、完全に灰燼と化した国都の復興事業。一朝一夕にしてかつたの姿に復することは容易でなかつた。古く中国の都府とその周辺に服飾充ち、ミネルバ書

九頁参照

*

建安25年
延平元年と
三才図會1-58同年 小林孝
の表

古代中国の... 周辺92

か人 小林881°
観 知2033°
大和ワ335°
547P
台 144°
1,142
P 1151-1/2 28°
聖芝九龍池」とある(同一地か?)
三才図會1-74下 朝政
三才図會1-76上 朝政の政治

226 40
187 1
39 39

黄初元年(二二〇)十二月、文帝(曹操)

の長子曹丕(ハヒ)二二六)は、洛陽宮殿

を造営し、洛陽に幸いて首都とした。

文帝がその在位中(三三〇-三六)に造営した洛陽宮というのとは、建始殿を中心とする北宮を

指し、文帝の時代には、この北宮内の

みか宮なまめた。

文帝は、この北宮を起居の場とし、建始殿

において朝政を行なった、という。

なお、文帝の黄初二年(二二一)から七年

(二二六)にかけて、洛陽北宮の中に「陵雲

台」、「靈芝池」、「天淵池」、「九華台」

などの苑池・観台が数多く作られた。

規模の突びも、これらは皆、北宮内部のものであつて、はなかつた。(「古代中国の都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、九二七九三頁参照)

太字

漢の明帝
133 1/2
6 斤

但し
大カシ681
「シュウトク」
とある

大カン 680^カ
イヌス、ス、ウ
小林末

タンク 810
トク

小林
年号

114

呼^こか魏^ミ国^{コク}に朝^{チャウ}献^{ケン}を行^{ハク}な^ンた年^{ネン}でもあ^ルる
 年^{ネン}に(二三九)当^{トウ}時^ジの洛^{ラク}陽^{ヤウ}の安^{アン}を、
 とに再^{サイ}現^{ゲン}し^テみ^ルこ^トに^シよう。
 明^{メイ}帝^{テイ}の末^{マク}年^{ネン}であ^リ、倭^{ヤマト}国^{クニ}の女^メ王^{オウ}卑^ヒ弥^ミ

① 太和元年（二二七）、夏四月甲申，初宮宗廟。
 ② 青龍三年（二三五）、……是時大治洛陽宮。
 起昭陽太極殿，築然章觀。百姓失農時，直臣楊阜
 高堂隆等各數切諫，雖不能聽，常優容之。

③ 青龍二年、秋七月洛陽崇華殿災。一一八月

命有司復崇華改名九龍殿。

④ 青龍中大治殿舍。一一帝遂復崇華殿。一時郡

國有九龍見、故改曰九龍殿。

通引穀水過九龍前、為玉井綺櫟、蟾蜍含受、

神龍吐火云々。

三〇支(文庫) 1-9/下末^P

香粟山 ①1128³ 18³
 三〇天(陸) 1-105³
 ②1373³

三才图会
1-92^p上
管-?

大カン
1436^上
造
了

南委栗山爲円丘
景初元年(二)

以下

などと記されている。
 古代中国の都市とその周

服部克彦、ミネルバ書房、九三〇四頁。二七頁参照。

明帝は、太和元年（二二七）夏四月に宗廟

を造り、ついで青龍三年（二三五）には洛陽

南宮の大規模な経営にとりかかった。この

ト
ん
ト
は
百
姓
の
農
時
を
う
ば
つ
て
力
役
を
課
し
る
よ
う
に

になつたので、楊阜・高堂隆などの諸臣が切

言てその非なることをいふ諫めた。
なかにかしう明帝

はこわらの諫言を馬耳東風と聞き流し

に
カ
め
る
と
こ
ろ
の
か
な
か
つ
た
う
き
ほう

明
 帝
 后
 漢
 の
 雄
 陽
 を
 模
 倣
 した

てい
き
う
し
の
悲松えの注に
二
三
千
一
二
月
六
日
の
記
エ
ハ
て
い
り。
け
で
な
か
た
口
二
国
夫
西
夢
走
纂
二
文

帝^{りたり}
紅^{のりてい}
黃^{とき}
初^{はじ}
元^{おいかん}
年^{なん}
十^{じゅう}
二^{ふた}
所^{ところ}
條^{じょう}
ノ
ニ
エ
言^{ことば}
之^{この}
水^{みづ}
一^{いち}
に

至明帝時始於漢南宮崇侯侯處走大石昭陽訪侯

宗憲	小幡	明
すうとく	たけ	帝
えん	／＼	の
		時
		代
		に
		な
		一
		に
		し
		め
		て
		漢
		の
		南
		寧

兄	き	崇
工	こう	復
三		展
山		の
マ	ま	お
単	たん	た
多	た	場
二		戸
子		に
一		
そ	そう	太
う		極
一		・
		昭
		陽
		の
		言
		展
		を

走
工
一
た
人
社
議
は
よ
一
曹
鬼
は
や
う
り
き

では、
ま
り
か
ん
だ
い
ほ
ぐ
や
う
ニ
サ
ン
ち
く
を
そ
の
ま
ま
に
用
い

[illegible]

~~生~~
~~之~~
~~を~~
~~と~~
~~し~~
~~て~~
年
和
月

HW 1.145^P

1-106°F

三〇支-I-127 (茶)

古代中国 - 1064P

以下 前页 3斤

焼やけ跡あと

(387年 孝惠帝 3代 成帝) 此有る

前漢書 819 前漢書 11代 成帝 在位 前33~前7

小林 474

11-の時代 小林 474 P
漢詩 旺文社 235 236
長恨歌の末

1,146 P

⑤ 1144 15 古代中口の都市とその周辺 92
前頁 139 中口の都市 64
前頁 154 ⑤ 1144 15

天つ改行 改行

前漢第十一代成帝(在位前三三~前七)は長安に昭陽殿に
 長安にあり、を建立した。
 唐代の楊貴妃は長安の昭陽殿に住んで
 いた、
 という。へ「漢和辞典」小林信明、小学館
 へ昭陽殿へ。145「長恨歌」漢詩、藤野岩友、旺文社、
 へまた、唐代の長安城に、大極殿へ(大極
 宮)があつた。

小林 504 P
大極殿

小林 499 P
大極殿

という。「奈良の都」虎尾俊哉、講談社、

八九頁。「長安から平城へ」江上波夫編、

平凡社、四八頁(唐の長安城の図)参照

・ようするに、長安城にも昭陽殿や大極殿

(大極宮)があつた、ということが分かる。

一方、洛陽城においては、先述のとおり、

「魏の」明帝の時に、はじめて、漢

の南宮崇徳殿の處(焼け跡)に、大極・昭陽の

諸殿が起工された。

と理解される(すこ前に述べた「三国志」魏志、文帝紀参照)

加えて、後述

由 1144 139 144

初版元1285"
創建 初版2建1320
HL 東坡集 820 東坡集

水経注記 水条に
 西晋の文
 陸機の「洛陽記」
 洛陽宮 城の西面に陽渠とい
 うのがあり、周公が制したものだといっている。
 洛陽内城（かつての洛邑）をめぐり陽渠水
 とある。「洛陽伽藍記」水経注「中国古典文学大系」平凡社、
 洛陽内城（かつての洛邑）をめぐり陽渠水

洛陽内城のまわりの陽渠水および穀水

曹魏の明帝の時に始めて凡太極殿は、日照陽
 ともあれ、
 曹魏第二代明帝の時に洛陽城の南宮に創建さ
 れた人の曰太極殿は、日本の都城
 変遷の歴史を考えるに当って、特に重要
 だ
 と思われ。

⑤ 1149⁹
⑥ 1150⁹

西晉以隆

26

$$1.147^p - \frac{2}{2}$$

洛陽加うん 313°下

水
た
の
~~た~~
ろ
う

(卷頭の第6回参照)

(1) - 85^T

小冊
49⁰
第6回
(5/5)

ま
た、
水
経
注
凸
穀
水
糸
等
K
よ
る
と
、
周
に

つ
フ
く
秦
・
漢
・
魏
・
西
晋
・
北
魏
の
時
代
に
も、

洛陽宮城のまわりをへ掘割りかぐるりとぬ

く
フ
て
い
て
、
|
穀
水
か
ら
引
き
入
れ
ら
れ
た

水加回流していたようにある。()
洛陽伽藍

水经注
中国古典文学大系
平凡社
三

一三頁、三八三頁、北魏洛陽伽藍圖、等參

照

● 名邑（洛陽宮城）のまわりを巡る周代の公

きり
わ }
く
すい }
き
すい }
き
き }
き
き }
き
き }

掘り割
穀水
陽渠水
の構
想
秦
前

漢、後漢を経て、曹魏・西晋、北魏へと、次

々
に
絶
え
る
こ
と
な
く
継
承
さ
れ
て
い
っ
た
の
だ
ろ

う、と推察される。

(巻頭の第611図参照)

小町 49^P
第6回

新R(1)-85^D~

合和3天
4/26 OK

小时 56^p
第 11 回

改行

三〇五-I-112^P

改行

三〇五(I)-101^P

1.148^P

スウツ 1242^P
サイシ 1040^P
歳首 1040^P

備さ 95^P

三国志 原注 1-88^P
古代中 - 周 217^P

三国志 原注 1-88^P

同文 1143^P - 部記載

洛陽内城のまわりをめぐる陽渠水

三国志 魏志 第三、明帝紀、青龍三年

(二三五) 条の注に引用の「魏略」には、こ

う記さ水に「(部重) 是年起太極諸殿」

「(青龍三年) 魏略曰、為玉井綺欄、蟾蜍含

受、神龍吐。使博士馬均作司南車、水転百

銀、歳首建巨獸、魚龍曼延、弄馬劍騎、備如

漢西京之制、洛陽城の西方から東方へ向かつて流れる、穀

水の河水を引いて九龍殿の前に流し、白玉で

飾った井、たや美し、模様のついた手すりを

「つらえ、彫像のひきかえるにその水を受け

させ、神秘的な龍の彫像、その水を吐き出させた。

コケヨ ケー20 20X20

2頁前 P. 1147^P
トル

小林 1148^P
漢リユウ

大カワ 1545^P

大カワ 1545^P

大カワ 1040^P

大カワ 1104^P

蔓でなさい!

313^PF

④ 1054⁹ 洛邑・成周の図

⑦ $1147^{\circ} - \frac{1}{2} \times$ 移左

古代中 -- 同日 217^P

1.149P

三交-I-13^p注42

(大前) 殿前の激水に入った後、水を出て庭に戯る。戯れる変幻の戯術(馬の上で逆立ちする)を演出して、弄馬倒騎(馬を乗りかえ、馬の上で逆立ちする)の曲芸が演じられた。それらはすべて、漢の西京(長安)の制度と同様であった。このようにして、宮殿をはじめとする諸施設の造営が、文帝・明帝の頃に進められていった。洛陽の都は、後漢代のあの繁栄を取戻しつつあった。なお、これらの宮殿や苑池が洛陽城内のどの場所に営なまれていったのか詳かでないとはいえ、――ある程度のこととは、うかがい知ることが出来る。

というのは、幸にも、これらの曹魏時代のものから次の西晋へ受けつがれ、――そしてさらに北魏の洛陽においてもその遺構が復元されたからである。(水経注に、洛陽伽藍記に、元河南志に、古代中国の都市とその周りに服部克彦、ミネルヴァ書房、二一七頁参照)

水経注に穀水条によると、周(周公旦)の頃、秦、漢の時代に、洛邑(洛陽城)

古代中国の都府とその... 218°
 水経注 307° 286° 城門 水経注 313° 水経注 313° F8行
 ① 1103° 左 高等地図 53°
 H18.10.24 ④ 支渠 218° 1005° 分岐 197° 支渠 150°
 渠(き) 563° 27° 1148°

のまわりを取り囲むように堀割りなどがめぐ
 らされていて、穀水(もくすい)は洛水(らくすい)から引
 かれた水が迴流(かいりゅう)していたようである。へて洛
 陽伽藍記・水経注に中国古典文学大系、平八
 社、三一三頁の下欄参照)
 この構想は、曹魏時代にもそのまま引き継
 がれ、さらに西晋・北魏へも伝えられ
 ていたと考えられる
 曹魏・西晋・北魏時代には、洛陽西域の
 函谷関(くわん)の方から東流してきた穀水が宮城
 (きやうじやう)の城内(じやうじやう)外の北西隅(きやうしやう)に
 おいて分岐(ぶんぎ)されていった
 「本流」は宮城北面を東流し、一方
 の「支流」は、西面城壁外を南流し、南面城
 壁外を東流し、さらに東面城壁外を北流して
 再び穀水と合流するようになった。陽
 渠水(きやうすい)はまた、渠水(きやうすい)と称(なづ)さ
 れた。渠水(きやうすい)は、この陽渠水(きやうすい)からさら
 に分岐(ぶんぎ)された
 支流が、城門や城壁をくぐり抜け、宮城内へ
 入って、城内の水流や池などを形づくるので
 あった。
 その支流の一つは、西面北頭の閶闔門(かんかんもん)の近

地
たいりゅうし
（滞 留室か）

街 大か 1992, 大か 1351, 353^P
慣 かイ 渠 ゴモ

池の庭石が、多数発見された。
その際、曹魏・西晋時代の
靈芝・九龍

よく調べてみると、こゝらは初めに組ま
たままで少しも毀壞（こわ）れることされてい
なかつた。
また、その石工の細密（さいみつ）さから、
当時のものと
みて全く疑（うたが）はうところなく、
奇（き）に――精緻（せいせい）な
ること今（いま）に及（およ）ぶな
と驚嘆（きやうたん）され、その構造（こうぞう）がそ

のまま用いられたという。(「古代中国の都
市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、
二一七―二一九頁)「洛陽伽藍記・水經注」中国古典文学大系
平凡社、三四頁上段(他参照)

1.151^P-2/2

ともあれ、

洛陽宮城は、

穀水・

陽渠水の流れによっ

て囲まれており、日島状の呈していた✓

というところが目される

・日島のように水中に浮かぶ洛陽の宮城は

華麗極まりない宮城門や

ぐるりと連なる城壁などを水面に映して

いたのであろう。

・それは、心ときめく美しさだ、左に相違ない。

と想像される。

*

金墉城
洛陽の中心に
あり、

中口の帯部 62°

1.152°

310°

改行 洛陽が19°

金墉城

このように曹魏時代の洛陽を見ると、漢代の帝都にならうとした例が数多いとはいえず、異なる点もまた散見される。

漢代と違っている点の一つとして、金墉城が洛陽城の西北隅に加えられ、北へ突出した。

というところがあげられる。(巻頭の第9図参照) 金墉城について、少々理解しにくい。

水経注に穀水条に、後漢のころ記されて、穀水はまた東に向かい、金墉城の北をす

ぎる。(この城は)魏の明帝が洛陽城の西北角に築いて金墉城といひ、魏の文帝が層楼を

東北隅に起した。清末の学者(初代)は、洛陽伽藍記の第一巻(城)

なお、楊守敬は、洛陽伽藍記の第一巻(城)内に、金墉城の東北角に魏の文帝が造つ

た百尺楼がある」とみえるので、正きに文帝が層楼(百尺楼)を造り、のち明帝が金墉城

第二代

初代

1.153^P

④1140[〃] 都府 新史820[〃] 都府 ④1140[〃] 10[〃] 行

天つぎ
改行

12/25 下 12/25

12/23

*

帝都に村田治郎、綜芸舎、六二頁参照

六三

城の西北隅に築かれたものだった。(「中国の
・都府の三台も、洛陽城の金墉城も、共に主
台から示唆されたものなのかも知れない。
武帝が都府の宮城の西北隅に築いた三
め、加設物なのだから、魏の曹操(すなわち
金墉城は、洛陽城の中備を強化するた
陽伽藍記水経注(2)平凡社三二頁、注二
七参照)

1084[〃]

の城郭を築いたとき、層楼がその東北角にと

り入水したのではないかと考えている。(「洛

陽伽藍記水経注(2)平凡社三二頁、注二

七参照

金墉城は、洛陽城の中備を強化するた

め、加設物なのだから、魏の曹操(すなわち

武帝が都府の宮城の西北隅に築いた三

台から示唆されたものなのかも知れない。

・都府の三台も、洛陽城の金墉城も、共に主

城の西北隅に築かれたものだった。(「中国の

1358 1314-72
 5252
 1187-14
 1134-1/2
 1324-1/3

1156 1335 1/2
 1130-2/2 (外110)
 1124 1.154
 1159-2/2
 1155

「宮城門名」 「宮城の形態」 の変遷

曹魏の時代になった時、宮城門の名称の多くが変更された。 (時点で...)

つまり、後漢末に焼失した宮城門を再建した。これら宮城十二門のほとんどが改称されたのだ。

尚、洛陽内城 東西南北各面の宮城門については、後漢・曹魏・西晋・北魏の四代を経る間に変更されていくものが多いから、一括して示すと、第 表のよう長なる。

東西六里・南北九里の長方形であつたという。 (第十四章へ後漢の都日 雒陽) の項において既述

とところが、西晋時代の都城は、東西七里・南北九里であつたと、晋書 卷十四、地理志、上、河南郡の条に記されている。

すなわち、西晋時代の洛陽城の東西が (後漢時代より) 一里広くなつており、注目される。

最近、考古学的調査によつて、この点か明

右面全面に、

限度一杯、大木
ばかりに掲載
したい。

文字全てゴチ。おと大木字城
様の太さは、このまゝにね。

消耗の「耗」です。
消耗の「耗」です。

1564
第22表

洛陽宮城門名一覽表 (新設東端門のみ想像)

◎印は、宮城の正門を示す。

位	東面			南面			西面			北面	
	北頭	中頭	南頭	東頭	正脇	西頭	南頭	中頭	北頭	西頭	東頭
時	北頭	中頭	南頭	東頭	正脇	西頭	南頭	中頭	北頭	西頭	東頭
	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
代	北頭	中頭	南頭	東頭	正脇	西頭	南頭	中頭	北頭	西頭	東頭
	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
後漢時代	北頭	中頭	南頭	東頭	正脇	西頭	南頭	中頭	北頭	西頭	東頭
	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
曹魏時代	北頭	中頭	南頭	東頭	正脇	西頭	南頭	中頭	北頭	西頭	東頭
	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
西晉時代	北頭	中頭	南頭	東頭	正脇	西頭	南頭	中頭	北頭	西頭	東頭
	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
北魏時代	北頭	中頭	南頭	東頭	正脇	西頭	南頭	中頭	北頭	西頭	東頭
	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門

1364
改行

「古代中国の都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、96頁の表

改行

綜芸舎、65頁「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平社、3~5頁

383頁「北魏洛陽伽藍圖」を参照。

由1161E=2/2 日本A門と氏族名

平昌門

中央部に配置した。

一説に、

と記されていて、興味深い。[] ぬれる。

年(三〇四)夏六月条を見ると、
「新作三城門」
[] 字書房、九五頁参照

たのは、何時だったのだろうか。
[] 晋書 卷四 惠帝本紀の永興元

では、城壁がこのような形に作り変えられ
ったのだった。[] 古代中国の都市とその周辺 服部克彦 ミネル

になるわけで、なかなかむつかしい形[] 状にな

た形[] 南北に長い長方形の東北部分が欠けこん

・ ようするに、手みじかに言えば、
かりになる [] が分るというのである。

里であるにもかかわらず、
・ [] のために、北面の城壁で測ると東西が約六

と [] 一里ばかり東方へ突出している

とを除いて [] 南側の四分の三ほどの全て

らかにされた。以下、巻頭の第10回参照

西晋の国

304
280
また改訂
1157 太康元年
改訂 1158-34
1.156 P-2/3
せしん 元1267
前身 以前の開

ミネルヴァ 96 213行

しく建た

「西晋（二六五）三〇六」の時代に、兵火によって焼かれた城門（三城門）が、新しく作り直されたのであろうとする見解がある。（「古代中国の都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、九六頁参照）なるほど、焼け跡の場所に門を再建したことを「新作三城門」と述べているのかも知れない。しかし、旧来の場所と違う所に門を新築したのか、新作三城門と記述しているようにも考えられる。

そして、もしもそうだとしたら、東面北端の「建春門」は動いていないのだから、

(1) 東面中央の門（東陽門）
(2) 東面南端の門（青明門）
(3) 南面東端の門（〇〇門）

と、北魏の開陽門の前身であるという門。後述の三つの門が、新たに作られた可能性があるといえよう。（巻頭の第10図参照）

四 察するところ、晋の恵帝の永興元年（三〇四）より少し前の「太康元年（二八〇）頃、宮城の形状が変更工事が開始されたの

東洋文庫 1997

流路変更

1,156^{P-3}/₃

合流
行合
出合

2367

①1154^{P-3}/₃
②1156^{P-3}/₃

拡張して新三城門を作った三〇四年の二十四

たあろう、と思われ。

恐らく「日九六城」から「日九七城」へ

線するに際して「日太康元年」(二八〇)頃、予め

「九六城東壁」に沿って南から北へ流れていった

陽渠水を、東方へ一里ばかり移動させ、一ま

た、宮城東北隅から一直線状に南流していった穀

水を、南北に長い長方形の東北部分が欠けこ

んだ九七城の城壁に沿って流れるように流路

変更した

のであろう。(巻頭の第10図参照。追って詳述)

その結果、

へ穀水は、宮城北面を東流し、宮城東北角

で南に向きを変え、そして、宮城東面

日建春門以外の日石橋あたりで折れ曲って

東へ向い、更に東一里ばかりの所から南へ流

れ、一宮城の南半部を回流し、東壁東南

部分に沿って北上する陽渠水と合流する

とった複雑な流水を形成することになった

と推察される。(「洛陽伽藍記・水経注」

中国古典文学大系、平凡社、末三頁の「北魏

洛陽伽藍図」参照)

(*)

①1155^{P-3}/₃に合流せる

級 2行
記主のてい

312~
水経注 313
42770 KH 18.10.28

は115 治陽からここ
馬実 34
版 1334 46 1215
1155

ハタ 小林
距て 938
1.157 - 1/3

こ

先ず、建春門外の石橋について記載

されている。水経注に穀水条の記事を見てお

こう。穀水はまた東で屈して南へ向かい、建春

門の石橋の下をすぎると、小加すなわち、後

漢時代の（上東門）である。橋の左右と

に二本の柱の誤記であろうかともいう。石柱

が建ててあり、橋の右側の柱の銘に、陽嘉四

年（一三五）西女申の日、馬実、石橋

の梁柱を監督して作らせ、工匠をあつくりま

す。のて、要妙の巧を尽くさせた。重い石を集め立

て、高くかさねて周から距て、橋のつくり

は路が広く、万里に流通する。云々と記さ

水ている。とある。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典

文学大系、平月社、三一、二、三頁。同書四六

頁）注（参照）

つまり、建春門外の広幅の石橋は、後

漢の陽嘉四年（一三五）に作られたことが分

る。

この頁 8行

1158
-1/4に
合わせ

新史記 357^P 三〇〇時代 220~280
漢 307^P 晋の統一まで

1.157^P-2/3

橋 120^P 橋 44^P 橋 44^P

魏 220~265^P 西晋 265~316^P 同文 1173^P 1334^P-3/3

洛陽カラン記 36^P 427^P 418.10.28^P

一方、日老陽伽藍記に卷第二へ城東に記されている次の記事が特筆される。
「建春門の外に出て、一里あまりゆくと、東石橋につく。
橋は南北に通っており、晋の太康元年（二八〇）に造られたものである。橋の南は魏の時の馬市があった所で、曹魏末ころの二六二年に嵇康がここで処刑された。（中略）
南北に通じるこの橋は、晋の太康元年（二八〇）、晋が洛陽に都へてい）た時の市南橋である。云々」
（建春門外の石橋と混同した）劉澄之たちは「この橋（東石橋）の銘を見て、それで橋（建春門外の石橋）が太康の初めに造られたのだと思つたのであろう」とある。（洛陽伽藍記・水経注）中国古典文学大系、平凡社
なお、司馬昭の子、炎（武帝）在位二六五（二九〇）は魏の禅譲を受けて晋王朝をたてた。太康元年（二八〇）に呉を併合し、天下を統一した。（東洋史辞典）創元新社へ晋へ参照

新史記 307

へ司馬炎へ

へ八二〇頁の系図

コクヨ ケー70 20x11

新史記 820^P 系図

363 次頁 35

36^P 145^P F145^P

注目される 1.154^P 19

①1156^{P-1/3} 179

市南橋 前頁10行下

1,157^{P-3/3}

ひあえ

高揚 761^P

前頁10行下

つまり 次頁7行

すなわち、天下を統一した太康元年に、
（市南橋）も造った。
のだった。

●それまで木の橋があった所（もーくは橋が
かかっていた所）に、——晋は日東
石橋を造ったのだろうか。

●そうかも知れない。——か、この物語では
へ意気が高揚して、いたこの当時、晋は日九
六城の東南部の拡張工事に着手し、——

（市南橋）↑↑↑を作ったのであろう。
と考えてみたい。

●そしてその後、事業を
へ宮城東南部の拡大行ない、西晋の恵帝の永興
元年（三〇四）六月に、新たな三城門を作つて
日九七城を完成させた。
と仮定したい。

✱

(三八〇)

新96P

曹魏時

1.158^P-1/4

①1133^P-3/4
①1134^P-1/2 129

類文①1133^P-3/4 39

①1133^P-4/4 69
①1134^P-1/2

と述べてた。(第十四章へ後漢時代の雒陽宮
城南面の正門)の項において既述)これらの
後漢から曹魏へと引き継がれたとき、宮城
南面の門の位置は動かされなかつたか、門の
名称の多くが変更された。(巻頭の8・9図、第22表参照)
東から西へ、曰開陽門、曰平昌門、曰宣
陽門、曰津陽門、という名で呼ばれた
。そして、後漢の時に引き続き、曹魏の時代
にも、宮城南面の東から二番目の門が正門と
されたのだった。

平昌門

(1) 後漢の時の宮城の正門は、曰平昌門であり、
中央(中軸線上)にあつたのであろう。
(2) つまり、後漢の時代の九六城南面には、中
央より東側に一つの門(開陽門)、中央より
西側に二つの門(小苑門と津陽門)が設けられ
ていたものであろう、

(平城門)

㊦ 1133^p - 4/4

㊦ 1155^p - 3/2
数 前頁(62)

1,158^p - 3/4

㊦ 1134^p - 1/2
トル

㊦ 1134^p - 1/2
トル

へ曹魏時代の宮城の正門曰平昌門は、九
六城南面のほぼ中央(中軸線上)にあつたの
であらう✓

と推察される。

㊦ とすると、曹魏時代の九六城南面には、
中央より東側に一つの門(開陽門)、中央よ
り西側に二つの門(宣陽門と津陽門)が設け
られていたことになる。(巻頭の第9図参照)
㊦ すなわち、

へ曹魏時代の宮城南面には、東側の方よ
りも、西側の方に多くの宮城門があつた
であらう✓

と想像される。(第十四章へ後漢時代の雒陽
宮城南面の正門)の項における類似の記載参
照

(*)

494
-316
178

東門史年357P 316西晋減主入こうろ
①456 2/3 652 洛陽ハ西晋 均衡600
494年
①1156 2/3

1.158 P-3/4

①1188-3/3

は、
一、
何と
いう
名で
呼ば
れた
の
だ
ら
う
か。
の
門
が
新
た
に
作
ら
れ
た
と
解
し
て
み
た
い。
宮
城
南
面
の
東
半
分
は、
西
半
分
に
比
べ
て
い
い
よ
い
よ
不
均
衡
で、
も
の
た
り
な
い
感
じ
と
な
る。
な
る
ほ
ど
西
晋
時
代
当
時
に
洛
陽
宮
城
の
南
面
に
五
門
が
あ
り、
合
計
十
三
の
宮
城
門
が
あ
っ
た
と
明
記
し
て
い
る。
文
献
は
な
い
よ
う
な
か、
こ
の
物
語
で
は、
「
新
作
三
城
門
」
と
い
う
記
事
を
重
視
し
て、
日
東
陽
門
、
日
青
明
門
、
及
び
日
南
面
東
端
の
門
が
新
た
に
作
ら
れ
た
と
解
し
て
み
た
い。
側
へ
一
里
ほ
ど
広
張
さ
れ
た
と
な
る
と、
そ
の
な
の
に、
西
晋
時
代
に
宮
城
の
東
南
部
が
東

1159-3/4 189

1.158-4/4

「晋書」 48.2.6
1156-3/3 198

●五つの宮城門が、南に打つて、
ことなる（巻頭の第10図参照）
配置されていた✓
中央の正門曰平昌門は、東西両側に
配され、二つの宮城門の字をもつ門が
に新設門曰建陽門が作られたとすると、
へ宮城南面に五つの宮城門があり、
中国古典文学大系、平凡社、三一七頁参照）
城門へ、西晋時代に、九六城から九七
に新設門曰建陽門が作られたとすると、
へ宮城南面に五つの宮城門があり、
中央の正門曰平昌門は、東西両側に
配され、二つの宮城門の字をもつ門が
ことなる（巻頭の第10図参照）
●五つの宮城門が、南に打つて、

および南面に多い曰陽門の字のつく門に引か
いて、この宮城東南隅角部の門は
建陽門

と呼称されたのかも知れない（巻頭の第10図で第22表参照）
少々意外なことなから、
穀水（陽渠水）はまた東に向かい、
穀水、条に、こう記されている
水経注

魏時代の開陽門の南をすぎると、
穀水（陽渠水）はまた東に向かい、
穀水、条に、こう記されている
水経注

と記されている。（「洛陽伽藍記・水経注」
と記されている。（「洛陽伽藍記・水経注」

中国古典文学大系、平凡社、三一七頁参照）

城門へ、西晋時代に、九六城から九七
に新設門曰建陽門が作られたとすると、
へ宮城南面に五つの宮城門があり、

中央の正門曰平昌門は、東西両側に
配され、二つの宮城門の字をもつ門が
に新設門曰建陽門が作られたとすると、
へ宮城南面に五つの宮城門があり、

中央の正門曰平昌門は、東西両側に
配され、二つの宮城門の字をもつ門が
に新設門曰建陽門が作られたとすると、
へ宮城南面に五つの宮城門があり、

●五つの宮城門が、南に打つて、
ことなる（巻頭の第10図参照）
配置されていた✓
中央の正門曰平昌門は、東西両側に
配され、二つの宮城門の字をもつ門が
に新設門曰建陽門が作られたとすると、
へ宮城南面に五つの宮城門があり、

天正改行

東武寺645

魏志11P

タイル ⑩1041-1/2
⑩1046

タイル ⑩1041P
⑩1046P ⑩1057-3/2 ⑩1057-3/2 ⑩1057-3/2

はんさ 煩瑣 ⑩1835

⑩1835

1.159P-1/3

ち開くその様子は、どんなに豪壮だったか。
であらうか。
とはいえ、宮城南面の四門を見慣れてきた者達の目には、――九七城の正面である南面に五つの門がひらいていて、少々煩瑣すぎる。このように見えたのかも知れない。
尚、参考までに述べると、晋書志第四卷、地理志上に、
「河南郡洛陽。――東西七里、南北九里。東有建春、東陽、清明、三門。南有開陽、平昌、宣陽、建陽四門。云々」
と記述されている。第十四章、中原の王城の変遷の歴史の項に、
「つまり、九七城南面西端の天津陽（門）と東端の建陽（門）とを混同しているように見受けられる。」
晋書志を著述した房玄齡（唐初の人）は、六四八の心の内に、
「洛陽城の南面には、四つの門があった」という思いが強く働いていて、
天津陽

建陽內 (東) 1158ⁿ-3/3

$$1.159 \overset{D}{\overbrace{-3}^{3}} \overline{) 3.493}$$

$$\begin{array}{r} 3 \\ \underline{-316} \\ 177 \end{array} \quad \begin{array}{r} 494 \\ \underline{-316} \\ 178 \end{array}$$

H/5.3, 13 (8)

④ $1155^{\circ} - \frac{1}{2}$ 表

FIV 「かみ矢知ない」前頁657.

22 表参照

のてあろう、と推察される。(巻頭の第9511区、
表参照)

宮城の正門といた

のすぐ近くに新たに設けた
宣陽門

を配した。(2) ^{あう}そして ^は曹魏・西晋代の ^{せう}平昌所

の間に二つの門（平昌門）と宣陽門

陽門
と
呼
び
と
し
て
西
端
の
日
津
陽
門
と

(1) 西晋の宮城南面東端の日建陽門を以て關


 恐らく、
 せいじん
 きやうなんけんとうじん
 けんよう
 かい

よ
う
で
あ
る。

の4
間隔
の14
調整
を行
った
✓

八九七城南面に四州を設ける
それぞれの所

こととし

十年後（四九三）に洛陽へ遷都した北魏は、

さて、西晋が滅亡へ三一六一にてから約百八



a

よ
く
分
か
う
な
い。
。

い
う
ま
で
も
な
ぐ
、
そ
う
し
た
詳
細
に
フ
ィ
ア
は

西(せい)の日本(にっぽん)津陽明(しんやうめい)加(か)藤(ふじ)水(みづ)て(て)ま(ま)った(った)の(の)だ(だ)う(う)う(う)か(か)

陽明・青明・建陽
か作ら水友時
宮城庫

九七城となり
新たに三
東

で
は
な
か
ろ
う
か
。 ()
詳
細
は
分
か
ら
な
い
()

明日
と
日
建陽
明日
と
と
とり
違え
て
ま
た
の

か
あやま

新刊(1-8) 洛陽から2383' ⑩1040°-1/2 ⑩1058°の図

1.159°-3/3 ⑩1188°-1/3 ⑩5252°

タイトル ⑩1187°-1/4

か、知れない。(巻頭の第8図 注②参照)

トイル
な、お、塞がれた口(旧)平昌門口のすぐ近く
に置かれて正門とされた口(新)宣陽門口
のことに、関しては、第十四章北魏時代の宮城南面の門
について、の項において述べたい。
また、北魏時代に至った時、宮城の西面北
端に、承明門が新たに築かれて、宮城門は
合計、十三門となった。
さらに、北魏時代の洛陽城を発掘した結果
からいえば、
へ南宮の位置が、かなり北の方へ移動し
た。
ように見受けられるという。(「中国の帝都」
村田治郎、綜芸舎、五七二五八頁参照)
とすれば、北魏の洛陽において、時代には
洛陽宮城内のかなり北辺寄りに、口北宮口の
みならず、口南宮口も置かれて、
いた。
ということになる。
* この口承明門は、基壇の無い少々小さな
門とされ、馬車の通用門として用いられたの
か、知れない。(巻頭の第8図 注②参照)

第22表参照

371 1155

小町56' 第11回北魏